# シュガーコート

MHA UNOFFICIAL FANBOOK
KAMINARI × JIRO

Presented by kinomint/mizuko

---はじめに---

・未来捏造、プロヒーロー設定。
・高校卒業後、耳郎はギャングオルカ事務所に所属（障子も）、上鳴も同じ県内のヒーロー事務所に所属しているという設定です。
・ギャングオルカ事務所は静岡県にあるということにしています。
・上鳴に元カノがいます。

1

買ってしまったのは、たまたま目に付いたからだ。
今日のインターンの帰り、駅ナカの洋菓子屋の前を通りかかった時に、綺麗にラッピングされたチョコレートが並んでいる一角を見つけた。
終わったのにまだあるんだ。そう思ってウチは足を止めた。バレンタインデーは昨日だったから、逆に目立って見えたんだと思う。
ウチの頭の中には自然と上鳴が思い浮かんでいた。あいつは毎年この時期になるとチョコが欲しいってわめいているから。教室で席が隣だから嫌でも耳に入ってくる。上鳴はウチと違って昨日は学校にいたはずだけど、今年はどうだったんだろう。誰かから貰えたんだろうか。
電車が来るまではまだ時間があって、同じインターン先から一緒に帰っている障子はコンビニに寄っていた。でも飲み物を買ってくるだけだから、たぶんもうすぐ戻って来る。そう思った時、気づいたらウチはもう、一番小さな箱を手に取ってレジに向かっていた。
どうせ今年も欲しい欲しいって言ってたんだろうし、美味しそうだからウチも食べてみたいし、何かお返し貰えるかもしれないし。そんなことを考えながらお金を払い、別にやましいことなんか何もないけど、すぐにリュックの中に仕舞った。
そのチョコは今、自分の勉強机の上に乗っている。
買ってきたのは良いものの、いつ渡すべきか迷っていた。寮に帰って改めて眺めてみたら、箱も紙袋も可愛過ぎる気がしてきて、どこからどう見てもウチから上鳴にあげる代物ではないのだ。本命チョコと間違われそうなくらいラッピングがちゃんとしている。
しばらくそれとにらめっこした後、ウチは手ぶらで共有スペースに向かうことにした。
エレベーターを降りると、さっそく談笑している声が向こうの方から聞こえてきた。その中に上鳴の声があったから、ウチの計画はあっさり失敗してしまった。
今もし上鳴がここにいなかったら、たぶん自分の部屋にいるだろうから、呼び出してさっさと渡してしまおうかと思ったのに。
（……まあ良いや、明日で）
当日に渡せていないんだからもう、遅れるのが一日だろうが二日だろうが大差ないだろう。

　そのまま共有スペースに顔を出さずに引き返そうとしたけど、やたら会話が盛り上がっているのが気になって、思わず立ち止まってしまった。
「あー俺も、食い切れねえから貰ってくれって言ってみてえ。このチョコうま」
「まあ轟にあげた女の子には、絶対知られたら駄目だわな」
「消費期限が近いもんは俺一人で食えねえ。捨てるのも悪いし」
「轟くらい貰ってたらしょうがないよね」
　声を聞く限り、上鳴の他に瀬呂と轟、それから尾白がいるようだった。
「てか尾白、お前だって呼び出されてガチっぽいチョコ貰ってたじゃんかよ！」
「何それ、俺知らねえ」
「が、ガチって、別に。ただチョコ渡されただけだよ」
「そんなん嘘だろ！　裏切者！」
「本当だって。……頑張ってくださいって、それだけ」
「逆に何だよその純真な感じ！　やべえ」
「てか上鳴、お前食い過ぎ」
「いや、有り難え」
　どうやら、昨日轟が貰ったチョコレートを男子で分け合って食べているようだった。
「瀬呂だって二年の子から貰ってたしさ、ずりーよお前らばっか！」
「お前も貰ってたじゃん。ブラッ〇サンダーとチ〇ルチョコ」
「確かに貰ったけど！　どう見ても義理じゃん！　ないよりマシだけど！」
　今年も期待した成果は得られなかったらしい。高校生活最後のバレンタインだったのに可哀想なやつ。と思いつつも、良いことを聞けた。ウチがわざわざ箱入りのチョコレートを買ってきた意味もあったのかもしれない。
「あー、マジで羨ましい。俺マジで何もなかった……」
　ため息交じりに上鳴がぼやく。その後、数秒だけ妙な間があった。
　――お前はあれだろ。なあ。
　――うん。
　そして急に声の音量を落として、瀬呂と尾白がそう言う。何だか含みのある言い方だけど、当の本人は二人の意図するところが分かっていないようだった。
　ウチはイヤホンジャックに神経を集中させていること

に今気がついた。ここから共有スペースまでは距離があって、皆の姿ももちろん見えていないから、普通にしていたら小声までこんなにちゃんと聞こえるはずがないのだ。いつから個性を使っていたんだろう。

今この寮にいる女子はウチだけだった。他の皆はインターンに行っていて不在だ。ウチはウチで夕飯を食べてお風呂から上がった後、共有スペースにいた男子たちにおやすみと言って部屋に引き上げたから、たぶんウチがもう来ることはないと思われているんだろう。

会話の雰囲気から、男子しかいない気軽さみたいなものを感じていた。だからこれは特に、ウチが聞いたら駄目な会話だ。

罪悪感を覚えて、勝手に動く耳たぶのコードに指を絡ませた。そしてエレベーターの方を振り返ろうとした、その時だった。

「耳郎と付き合ってると思われてんだろ」

瀬呂の言葉が、嫌にはっきりと耳に飛び込んできた。

ドクン、と心臓の鼓動が大きく跳ねる。

いきなり自分の名前が出てきたのに、気にしないで部屋に戻るなんてことはできなかった。踏み出しかけた足がピタッと止まる。「……は、え？　うぇ？　えぇ!?」と、上鳴が言葉にならない素っ頓狂な声を上げているのが聞こえた。

「実際どうなの」

「どうって、え、何もねえよ？」

「よく二人で部屋行き来してんじゃん」

変に心臓がドクドクと鳴って、全然鎮まる気配がなかった。

上鳴とお互いの部屋を行き来しているのは、別に周りに隠してはいないけど、わざわざ言いふらすようなこともしていない。「よく」と言われほどの頻度だと自分では思っていなかったけど、意外に周りからは見られているんだなと分かると何だか落ち着かなかった。部屋に二人きりと言っても、上鳴にギターを教えたり、漫画を貸し借りたり、一緒に宿題をしたり、駄弁ったり、他愛のないことしかしていない。

学校でだって、いつも一緒にいるわけではない。自販機に飲み物を買いに行ったり、ヤオモモがインターンでいない時に一緒に食堂でお昼ご飯を食べたり、タイミングが合えば二人で寮まで帰ったり、その程度だ。だから他のクラスの人からだって、勘違いされるようなことはしていないと思う。

「行き来はしてっけど、別に。だって俺、耳郎のこと女子として見てねえもん」
「お前、言い方」
「え、……あ、いやいやいや！　馬鹿にしてるとかじゃねえよ!?　別に耳郎に限ったことじゃなくて他の女子もだけど、何かもう仲間っつうか、戦友って感じじゃん。だからそもそも、そういう次元じゃないっつうか」
「あー、確かに。そういうのあるよね」
「分かるかも」
「だいたい耳郎だって、俺から女子として扱われたら嫌だと思うぜ。キモイとか言われそう」
「あ、おーい轟、起きってっか？」
「……お？　朝か？」
「ちげぇよ。いつから寝てたんだよ」
　ポヤポヤした轟をいじって笑っている声を背に、今度こそウチは引き返した。当然女子棟のエレベーターは一階に下りたままで、ボタンを押すとすぐに扉が開いた。
　チョコレートを渡す前で良かった。
　壁に寄り掛かりながらウチはそう思っていた。
　上鳴の言いたいことは分かっていた。たぶんちゃんと、上鳴の意図する通りに理解できている。きっとあいつなりにウチのことを尊重しようとしてくれている。だからあの言葉は、一緒にヒーローを目指している身として喜ぶべきものなんだろう。それは頭で分かっていた。
　なのにどうしても、そんな気分にはなれなかった。「だって俺、耳郎のこと女子として見てねえもん」がずっと、頭の中でぐるぐるしている。
　どういう気持ちでチョコレートを買ったのかを、今、唐突に思い知らされていた。ウチは確かに傷ついてしまっていた。ショックだった。思いがけず聞いてしまった上鳴の本音になのか、それとも、泣きそうなくらい動揺してしまっている自分になのか。自分のことなのに分からない。分からないけれど、一つだけ気づいてしまったことがある。
　ウチは、上鳴のことが好きだったんだ。

## 2

久しぶりに見る駿河湾は、真っ青に晴れた空の色を綺麗に映していた。太陽の光を反射した銀色の波がゆらゆらと揺れている。

助手席の窓からじっと海を見ていると、「もう夏みたいだな」と運転席の障子がつぶやいた。まだゴールデンウィークが終わったばかりだというのに日射しは熱く、じりじりと肌を焼くようだ。車のエアコンも頑張って冷たい空気を吐き出している。

「皆、元気だった？」

窓から視線を離し、そう聞いた。ちょうど赤信号で停止したところで、ウインカーの音がカチカチ鳴っている。

障子はウチにとって高校生活を共にした仲間であり、同じくギャングオルカ事務所に所属するサイドキック同士でもある。そういうわけで共通の知り合いや友達が結構いるから、ウチらの間で言う「皆」には色んなパターンがある。だけど詳しく言わなくても、障子はすぐに分かったらしかった。

「あぁ、相変わらずだ。元気だったぞ」

マスクで口元が隠れているけど、表情がふっと緩んだことは声色で感じられた。

「良かった。ウチも行きたかったな。今回十人以上集まったんでしょ？」

「そうだな、十二人だったか」

今年の三月にA組の同窓会があった。ずいぶん前から計画が立っていたから、ウチももちろん参加するつもりで休暇を取っていたけど、急な任務が入って行けなかったのだ。

ギャングオルカ事務所に入所して一年が経った後、ウチは東北にあるヒーロー事務所に出向に行っていた。その事務所はもともとギャングオルカのサイドキックだったヒーローが独立して設立したもので、普段から協力して任務にあたることが時々あった。勉強になるぞとシャチョーに送り出されて、もう二年になる。契約期間は残りあと一年だ。

チームアップの内容によっては毎週のようにこっちに来る時もあるけれど、今年は二月に訪れたきりだった。障子と会うのもその時ぶり。

今回静岡に来ているのはチームアップがあるからではなく、取り損ねた冬休みの代わりに一週間の休暇を貰っ

たからだった。先週障子に用事があって電話をしていた時に、帰省するついでに事務所に顔出すよと言ったら、事務所の車で駅まで迎えに来てくれた。たまたま外出する機会があったらしく、有り難く甘えることにして、今に至る。

信号が青になり、対向車を見送ってから右折する。

「上鳴が会いたがっていたぞ」

流れる景色を眺めながら、そろそろ事務所に着くなと思った時だった。障子の言葉に、視線を運転席にやる。

「同窓会の時、耳郎が急に来れなくなったと知って残念がっていた」

だけどすぐに、自分の膝の辺りに目を落とした。太腿の上で緩く組み合わせた両手の指先を何となく眺める。

「そう。……元気だった？」

「あぁ。あいつは特に変わらないな」

会った時のことを思い出しているのか、障子の調子が穏やかになる。今もあの賑やかなままなのかと思ったら、ウチも自然と笑っていた。

上鳴とは、出向に行ってからもう会っていなかった。卒業してから一年の間は結構頻繁に会っていて楽しかったけど、それと同時にしんどくもある期間だった。あの高三の冬の日に自覚してしまった思いはいつまでも萎むことなく、それどころか会う度に自分の気持ちを突き付けられるようで、正直疲れていた。だけど一緒にいて楽しいのも本当だから、会わないという選択肢も取れないというどうしようもない状況だった。

だから出向の打診があった時は、助かったと思った。二つ返事で了承し、さっさと手続きを進めた。仙台に引っ越してからは、意図的にチャージズマの情報を追いかけないようにし、自分から連絡することも止めた。この気持ちが消えてくれないのなら、せめて見えないようにと、硬い殻をつくって覆うことにしたのだ。最初は上鳴発信で連絡を取り合うこともあったけど、今はそれもない。

「……ない」

「えっ？」

ぼーっとしていて、障子が言ったことがよく耳に入っていなかった。というか何となく聞こえていたけど、聞き違いかと思ったから聞き返したのが正しい。だけどやっぱり合っていた。

障子は遠慮がちに、「すまない」と謝った。

「え、何。どしたの？」

今までの流れからして謝るポイントなんて全然ないし、そもそも障子から謝られるようなことをされたことは今までもなかった。ちょっと気まずそうにしている横顔をぽかんと見つめていると、続けた。

「……耳郎が時々こっちに戻って来ていることを、上鳴に言ってしまった」

「え、」

「耳郎と二月に会った話をしたら、驚かれてな。俺は何も知らなかったから、耳郎が静岡に来るのは珍しくないと言ってしまったんだが……、全然連絡を取っていなかったんだな。事情があってそうしていたなら、本当にすまなかった」

出向に行く前に上鳴からは、帰って来ることがあれば連絡しろよ、と言われていた。メッセージでも何度かそういう言葉を貰った。静岡に来る度に罪悪感がなかったわけじゃないけど、やっぱりウチは上鳴に言わなかった。

正直、バレたかとばつが悪い思いがしている。だけどそれは今、これまでのツケが回ってきただけのこと。障子が言わなくてもいつかどこかで知られることだろうし、全くをもって障子は悪くない。

障子がどうしてウチを迎えに来てくれたのか、今その理由が分かった気がした。このことをきっと言いたかったんだ。三月の同窓会があってから約二ヶ月、連絡を取り合うこともあったのに、障子は全くこの話題には触れてこなかった。つまりは、かなり気にしていたんだろう。ウチのこんなワガママのせいで気に病んでいたのなら、本当に申し訳ない。

「むしろ、ごめん。気にしなくて良いよ全然。ていうか今日、上鳴に連絡するつもりだったから。もともと」

「そうか」

障子の声が明らかにほっとしていた。それで申し訳なくなって、ウチはもう一度謝った。

話がひと段落した時に、ちょうど事務所に着いた。買ってきたお土産を持って車を降りる。

きっと大丈夫だろう、とウチは思っていた。さっき、障子が最初に上鳴の話題を振った時に、自然とわだかまりなく笑うことができたから。

そして障子に言ったことは本当だ。気まずい思いをしているだろう障子に安心して欲しくて適当なことを言ったわけではない。本当に今回は、上鳴と会うつもりでいる。自分の気持ちを確かめるために。

3

「つーかお前さあ、マジで急過ぎんだよ。もっと早く連絡寄越せっての」
水族館行きのバスに乗り込み、一番後ろの座席に二人で並んで座るや否や、上鳴は声のボリュームをしぼりつつそう言った。
言葉の内容自体は文句だけど、上鳴はどこか面白がっているところもあるようで、声の調子は弾んでいる。最後に会った時から変わらない話し方に懐かしさを覚えて、ふっと気が緩むのを身体中で感じていた。
「でも空いてたんだから良いじゃん」
「た・ま・た・ま・な。いつもこうじゃねえぞ」
「え、違うの？」
「違ぇよ。ひとを暇人みたいに言うな」
そして、もー、と言いながら上鳴は座席の背もたれに体重を預け、笑った。
ここが始発のバスは、出発まであと三分くらい時間がある。ウチらの他には、ずっと楽しそうにお喋りしている中年女性の二人組と、眠ろうと背中を丸めている若い男の子だけがいた。出勤ラッシュも過ぎた平日午前中のバスはがらんとしている。
一昨日ギャングオルカ事務所に顔を出してから家に帰った後、上鳴に連絡をした。いきなり電話を掛けたのに上鳴は意外にもすぐに出た。びっくりしている様子で、ウチが会えないかと尋ねたらもっと驚いていた。
ちなみに今もう静岡に帰って来ていて、会うなら今日から一週間以内しかないことを伝えると、今度は「は、マジかよ⁉」と素っ頓狂な声を上げて笑った。そしてちょうど二日後に上鳴も休みだから、その日に遊ぼうということになった。上鳴は、今まで音信不通だったことについては何も聞かず、すぐに了解してくれた。
通話を切った後のスマホの画面を見れば、通話時間はたったの三分ちょっとだった。拍子抜けするくらいあっけない、二年ぶりのコンタクトだった。
「なあ、これ買った？」
上鳴が鞄からイヤホンを取り出し、スマホに刺した。そして画面をこちらに向ける。表示されている画像は見知ったものだった。今年の一月に発売された、ウチの好きなバンドのオリジナルアルバムのジャケット写真。高校生の時に上鳴からおすすめのバンドを聞かれて、教え

た内の一つだった。
「普段はサブスクで聞いてっけど、これはCDも買っちゃったよね」
「ウチも」
「買った？」
「買ったに決まってんでしょ」
そんなの愚問だと言わんばかりに食い気味で返事をすれば、上鳴は嬉しそうに片方のイヤホンを差し出してくる。
「全部良いけどさ、俺特にこれが好きなんだよな」
耳に入れたイヤホンから軽快なギターサウンドが流れてくる。
そういえばこのアルバムを初めて聞いた時、この曲は上鳴が気に入りそうだなと思ったんだった。忘れていた些細な記憶がよみがえる。
あんたが好きそうだと思ってた。そう言おうとして、やっぱり止めた。もう片方のイヤホンがいつの間にか上鳴の耳に繋がっていて、それを見たら言葉が出てこなかったのだ。
こういうかたちで一緒に音楽を聴くことは高校時代からたびたびあった。意識しないようにしていたけど、その度に胸をくすぐっていたのは、今思えば確かにときめきだった。
困ったことに、当時と同じ気持ちが今、胸の中に湧いている。硬くつくったはずの殻は簡単にひび割れて、その隙間から甘い痛みがゆっくりと流れ出す。
やっぱりか、というのが率直な感想だった。もう上鳴と会っても大丈夫かもしれないと思う心の裏側で、そんな自分を信じ切れていない部分もあったから、動じたりはしない。でもまだ落ち合ってから十分くらいしか経っていないのに、思い知らされるのが早過ぎるなとは思ったけど。
運転手が平坦な声でアナウンスする。プシューと音を立ててドアが閉まり、バスはようやく、億劫そうに走り出した。

水族館に行くことに決めたのは、ギャングオルカからチケットを貰ったからという、ただそれだけの理由だった。その界隈に知り合いが多いギャングオルカは、よく水族館のチケットを持っていて、時々くれるのだ。今回チケットを貰った水族館は、ウチにとっては地元だから子どもの頃から何度も訪れたことがある。だけど上鳴は

初めてだったらしく、想像以上に楽しんでくれていた。
　順路通りに進みつつ、イベントが始まったらそっちを見に行くということを繰り返して、途中で館内のレストランでお昼を食べたりしていたら、何だかんだかなり時間が経った。イルカショーにアシカショー、ペンギンの散歩。イルカショーに至っては二回も見た（最前列に座って水かぶりたいと言われたのは全力で拒否した）。
　全部回り終わって、最後に売店に入った。
　タンブラーを手に取って見ていたら、さっきまで一人でチンアナゴの抱き枕と見つめ合っていた上鳴が隣に来た。
「お、何それ」
「タンブラー。こういうの欲しかったから、買おうかなって思って」
　ステンレスのタンブラーにシンプルなペンギンのイラストがプリントされている。他にも絵柄違いが三種類くらいあって、どれも可愛過ぎなくて使いやすそうだった。
「へー、良いじゃん。俺も買っちゃおうかな」
　上鳴が身体を屈めて棚の中を覗く。
「何であんたまで」
「せっかく来たから、何か買って帰りたかったんだよ。あ、チンアナゴだ」
　水槽を見て回っていた時もじっと見ていたし、どうやらチンアナゴがかなり気に入ったらしい。上鳴も一つタンブラーを手に取った。
「……お揃いみたいじゃん」
「確かに。良いじゃんお揃い。一緒に来た記念だな」
　そう言って笑いながら、イルカとアザラシもあるぞと無邪気にウチに勧めてくる。
　上鳴は、他の女の子にもこういうことを言ったりしているんだろうか。これまで数えきれないくらい思い浮かべたこの問いは、いつまでも答えが分からないまま胸の中でくすぶっている。
　高校入学当初はチャラい男子というイメージだったけど、一緒に時間を過ごす中でその印象は少しずつ変わっていった。気軽に調子の良いことばかり言うのは最初からそうだけど、ひとに対していい加減なことを言ったり、だらしない態度を取ったりすることは決してないやつだと知っている。だからなのだ。だからウチは、上鳴がくれる言葉や態度を大事に受け取ってしまう。
　でもウチが一方的に好きになったんじゃない。そう思わせてしまう言動を上鳴がしているんだと、勝手に腹立

たしい気持ちになってしまうんだからどうしようもない。だけど一番ムカつくのは、上鳴の言動にいちいち喜んでしまう自分自身なのだ。

「つーか別々に使うんだから、お揃いって分かんねえじゃん。そんな嫌そうな顔すんなよ」

「そーだけど」

結局そのまま、上鳴はチンアナゴ柄の、ウチはペンギン柄のタンブラーをそれぞれ買った。

4

「はい、上鳴の」
ベンチに座っている上鳴に、プラスチックカップに入ったアイスカフェオレを手渡した。そしてウチも隣に腰を下ろす。水族館のそばにある海浜公園はさわやかな風が吹いていて、息を吸い込むと潮の匂いがした。
「うぇい、ゴチです」
「別に。あんたはお昼多めに払ったじゃん」
「あんなん数百円だろ」
昼食の会計は上鳴がまとめて払ってくれた。ウチが食べた分のお金を渡す時、細かいのが面倒だからと切が良い金額で良いと言われた。それでちょっと奢られた状態になっていた。それが何だか気になっていたから、公園で移動式カフェを見つけた時に、ウチが飲み物奢るよと申し出たのだった。
上鳴はカフェオレを一口飲み、「お、美味い」とつぶやく。ウチも自分のジンジャーエールを飲んだ。喉が渇いていたから美味しい。
広い石階段を降りた先にある砂浜には、子どもを連れたお母さんや、大学生くらいのカップルがいて、楽しそうに時を過ごしている。隣の上鳴に一度ちらっと視線をやってみたら、上鳴もストローをくわえながらその景色を眺めているようだった。
しばらくそのまま二人で黙って座っていた。
そして飲み物が半分くらい減った頃、上鳴が不意に口を開いた。「耳郎、さ」と静かに切り出されたから、ウチは隣に視線をやった。
「……結構、こっち来てるんだって？」
ぽつりと、少し躊躇いがちな喋り方だった。こっちは見ずに、視線はさっきと同じく正面を向いている。
やっぱり聞かれるか、と思った。
一昨日電話で話した時も、今日会ってからも、ウチらは一度もこの二年間どうしていたかを話題にすることがなかった。絶対に会ってすぐ何か言われるだろうと身構えていたから意外だった。落ち合ってすぐにバスに乗り、車内ではずっと音楽を聴いていたし、水族館を回っている時はその感想ばかり話していた。お昼ご飯を食べている最中もこのことに触れられなかった時、上鳴は避けているんだと確信した。このまま何も言わないつもりなのかもしれないと思った。

でもそうじゃなかった。タイミングを見計らっていただけだったんだ。
「三月に同窓会あったじゃん、耳郎が来れなくなったやつ。そん時に障子から聞いたんだけど……」
ようやく上鳴の視線がこっちに動いた。だけどすぐにまた逸らされる。
「全然連絡なかったから、てっきり俺、もう仙台に行きっぱなしなんだと思ってた」
「……うん、ごめん」
「帰って来ることあったら教えてって言ってたのにさ」
「でも、会う余裕ないっていうか、トンボ帰りの時も結構あるから」
「だとしても、でも。ちょっとショックだったぜ」
上鳴がこんな風にはっきりと、自分の感じた嫌なことを主張してくるのは珍しかった。というか初めて言われたかもしれない。友達が傷つけられた時は本気で怒るけど、自分のことはあまり頓着しなくて、なるべく波風を立てないように振る舞うことが多いから。口調自体は全然強くないけど、むしろその気まずそうな響きがいっそう、本気で言ってるのだと伝えてくる。
自分のしでかしたことが、こんなに上鳴を不快にさせていたなんて思いもしなかった。というか、思う余裕がなかった。自分の気持ちをどうにかすることに一生懸命で、上鳴がどう感じるかなんてさほど真面目に考えていなかった。上鳴は友達が多いから、ウチたった一人が連絡しなくなったとしても、どうってことないと思っていた。
だけどこうして面と向かって言われて、今さら胸が痛み出す。
「……ごめん」
でも言えるのはそれだけだった。まさか、あんたのことが好きだから遠ざけたくて意図的にそうしていた、なんて口が裂けても言えない。
想像以上に元気のない声が出た。泣いてはいないけど、どこか湿っぽく響いた。
「あ、べ、別に怒ってるわけじゃねえから！　そうだよな、遊びで来てるわけじゃねえもんな。ただ、何か水くさいなーって思って。でもこうやってまた会えたから良いんだけど」
ウチの声に驚いたのか、上鳴は急に賑やかになった。ちょっとこっちに身を乗り出して、身ぶり手ぶりをしている。

「……うん」
　ウチが小さく頷くと、上鳴もほっとしたようで姿勢を直した。
「ていうか、俺が遊びに行っても良いんだよな。そっちにさ」
　そしてそんなことを言う。突拍子のない言葉に顔を上げると、上鳴と目が合った。その表情はもうこわばっていなくて、いつも通りの穏やかな顔だった。
「……え、仙台？　良いよわざわざ、遠いじゃん」
　それは流石に勘弁して欲しい、と思ったらもう口がこう喋っていた。
　今まで上鳴に連絡しなかったことを申し訳なく思ったのは本当だ。出向へ行く前に上鳴から「戻って来る時は教えろよ」と言われて、ウチもその時は「分かったよ」と返事をしていたから。約束を破ってしまった自覚があるから、本当に悪いことをしたと反省している。
　だけど今後のことはまた別の話だ。こんな気持ちのまま再び会い始めたら自分がどうなるか、嫌な予感しかしない。上鳴には悪いけど、ここでもう約束をしないことが今のウチにとっての一番の誠実なのだ。
「いや、俺もともと仙台って行ってみたかったんだよ。あんまちゃんと行ったことねえから。案内してよ」
「えー……。でもウチ、観光地とかはよく分かんないんだよね。住んでるだけで」
「あーまあ、そういうのあるよな。あ、じゃあ一緒に探索すれば良いじゃん」
　もちろんウチの事情なんて知らない上鳴は、のん気な調子でそんな提案をしてくる。そう言われたら断る理由を探す方が難しかった。
　だいたい上鳴はどうして、こんなにウチと会いたがってくれるんだろうか。上鳴の人付き合いの仕方からすれば普通のことなのかもしれないけど、意識しているウチはそれをいちいち特別なんじゃないかと受け取ってしまう。でもその瞬間に「だって俺、耳郎のこと女子として見てねえもん」がよみがえって、うっかり期待したがる自分を牽制する。ヒーローになるための場所で、お互いヒーローを目指す身として出会った以上、ウチが上鳴の恋愛対象になることはないのに。
　高校を卒業してから一年の間、ずっとこの考えが頭の中でループしていて、苦しさを感じていた。それがまた同じだけの痛みを持って胸に湧いてくる。
　だいたい今日なんて、あんな柄違いのタンブラーなん

か買ってしまって一体どうするつもりなんだろう。あれを見る度に上鳴を思い出すことになるんだろうか。つらいを通り越してだんだん苛々してきた。これは良くない。ウチはもういい加減、こんなネガティブで面倒くさい感情は手放したいのだ。

「ていうかあんた彼女いないわけ？　ウチと遊んでる暇あったら、さっさと彼女つくんなよ」

「うぇ、何で急にそうなるんだよ!?」

上鳴は大袈裟に肩をびくっと揺らして驚いて見せた。

急、じゃない。ウチからすれば。ウチの中では全部繋がっている話だ。

「……何となく。上鳴、高校の時からいっつも、彼女欲しいって言ってたじゃん」

「まあー、高校ん時はな。俺も若かったよ」

「まだ二十一でしょうが。もうすぐ、二だけど」

「今は別にそんな。まあ、良い人がいれば、みたいな？感じっつうか？」

そして軽い調子で言いながら、後頭部の髪をいじる。

「いやウチに聞かれても知らないし」

「お前が振ったんだろ。てか、耳郎とこういう話すんの照れんだけど。初めてじゃね？」

「かもね」

上鳴の言う通り初めてだった。今まで上鳴と二人きりでいて、恋愛が絡んだ話をしたことなんてなかった。

上鳴が男女問わず他の友達と恋愛の話題で盛り上がっているのは、教室や寮の共有スペースで何度も見掛けていたから、そういう話が好きなタイプなんだということは分かっていた。でもウチといる時は一切そんな話題を振ってこないし、ウチも自分からは言わないから、いわゆる恋バナなんて上鳴としたことはなかった。

上鳴にとっては、「耳郎はそういう話をする相手じゃない」ということなんだろうけど、ウチに関して言えばただ避けていただけだった。本当は、上鳴がどういう人がタイプなのかとか、今までどんな子を好きになったのかとか、そういうことを聞いてみたかった。具体的に聞いてしまったら落ち込むことになるかもしれないけど、興味はあった。

だから半ばやけくそになっている今は、何でも聞けそうな気がした。自分に腹が立ち過ぎて、もうどうにでもなれと思っている。上鳴の恋愛エピソードについて根掘り葉掘り聞いて、いっそ打ちのめされてたって良いとすら考えている。

「この二年はいたの？」
「え？」
「彼女」
高校時代の上鳴に彼女はいなかった。卒業後も、ウチが出向に行くまでの間はいなかった。
ウチがじっと見つめると、上鳴は目を丸くして見つめ返してきた。何を聞かれたのか一瞬分からなかったような、そんな表情だった。本当にウチとはこういう話が結びついていないらしい。質問をようやく飲み込んだのか、数秒経ってから、こう呟いた。
「……まあ、一応。っても、もう一年くらい前だし、二ヶ月くらいで振られちゃったけど」
いたんだ。
彼女がいたことなんて予想していたのに、むしろそれを聞き出そうと話題を振ったくせに、いざ聞いたら聞いたで面白くなかった。たった二ヶ月で振ってしまえる、上鳴と付き合うことが何てことないような、そんな女の子が上鳴の彼女になれていたことが。二人の事情を何も知らない人間があれこれ言えることではないけれど。これは嫉妬なんだろうか。
「へー。どんな人？」
「どんな？　中学の同級生、だけど」
「連絡取ったりしてたんだ」
「いや同窓会があって、久しぶりに会って……。ってか、耳郎めっちゃ聞いてくんじゃん！　どうした!?」
上鳴は自分で言った通り、明らかに照れていた。ちょっと顔が赤くなっている。
一方ウチは、ツッコミを入れられても別に気まずくもなんともなかった。どう思われても良いやと、投げやりになっているからだろう。
「良いじゃん、減るもんじゃないし」
「減るもんとかじゃねえけど、何かお前にこういうこと言うの恥ずいんだよ！　だいたいこんなこと聞いて面白いか？」
「面白いけど。あんたからそういうの、聞いたことなかったし」
「……へ？」
「てか、人がこっちに来てるの黙ってたらショックとか言うくせに、自分は隠し事するわけ？」
「べ、別に隠し事じゃねえだろ」
「だってウチ、あんたに彼女がいるなんて知らなかったよ」

「それは耳郎が連絡寄越さないからだろ。……てか俺のことは良いんだよ！　お前はどうなんだよ、耳郎は」
上鳴はぶんぶん手を振った。反対の手も、プラスチックのカップを握り潰さんばかりの勢いで力が入っている。それを見てジュースを飲むのを忘れていたことに気づいて、ウチはストローに口を付けた。
「ウチが何？」
ジンジャーエールは氷が解けて、味も炭酸も薄くなっていた。
「あ、ずりーぞ！　自分ばっか。耳郎は彼氏できたのかよ？」
「別にあんた興味ないでしょ」
「あるある、めっちゃある！　聞きたい！」
「嘘」
「嘘じゃねえよ。あの耳郎響香がどういう男選ぶのかめっちゃ気になる」
「あのって何。しかも選ぶことができるような側の人間じゃないよ」
「えー、そうかぁ。耳郎は普通にモテそうだけどな」
そう言って上鳴も、味が薄まっているだろうカフェオレを飲んだ。

ウチはさらっと言われた台詞にびっくりしていた。上鳴からそんなことを言われるなんて思ってもみなかったから。声の調子から、口から出まかせを言ったとか冗談だとか、そういうことではないことは何となく分かった。
「モテたことなんてないよ。初めて言われた。告白されたことだってないし」
「それはたぶんあれだろ。耳郎がカッケーからさ、気安く近づけないっていうか。たぶん言わないだけでお前のこと好きだった人、いたと思うけどな」
「……そんなこと、ないと思うけど」
本来は嬉しい言葉のはずなのに、上鳴の口から聞くのは残酷だった。そんなことを言うなら、ウチはあんたからそう思って欲しかったのに。
膝の上に置いたカップは汗をかいている。しずくがジーパンに染みて、その部分だけ濃い色になる。
うつむいて少し考え事をしてから、ウチはその姿勢のまま口を開いた。
「てか別に、モテるかどうかはどうでも良くない？　モテたことない人間が言うのもなんだけど」
上鳴が何かを言おうとしたのが気配で分かったけど、気がつかない振りをして言葉を続けた。

「自分の好きな人が、同じく自分を好きになってくれるかどうか。それだけじゃない。それがなきゃ、どうしようもないじゃん」
言葉に表わすととてもシンプルだけど、それを現実にするのはとてつもなく難しい。ただそれだけのことなのに、どうしてこんなに難しいんだろう。
上鳴は確実に、ウチに好意を持ってくれている。高校を卒業してからもこうして遊ぶことができて、物理的に距離ができてしまっても会いに来ようとしてくれて、ウチにされて嫌なことがあったらちゃんと教えてくれる。ただの友達というエリアよりも、もう少し内側に入ったところにウチを置いてくれているような気がしている。
それなのに、恋人にはなれないのだ。よく遊んでいても全く踏み込むことができなかった上鳴の隣のスペースに、同窓会で久しぶりに会った中学時代の同級生がすっと入れてしまう、そのからくりがウチには分からない。
「もしかして、耳郎。……好きな人いんの？」
おずおずといった様子で、上鳴が聞いた。
ウチは何て返事をするか迷ったけど、たった今あんなことを言っておいて「いない」と言う方が嘘っぽいだろうと思って、黙ったままひとつ頷いた。
「……でも、ウチ駄目なんだよね。恋愛対象には見られないみたいで。仲良くはなれるけど、そこまでっていうか」
あまり先のことは考えずに、こう言っていた。緊張して、最初の方は声が少しだけ震えてしまった。上鳴にこんなことを話してどうしたいのか、自分で分かっていない。
「そうか？　耳郎が自分でそう思ってるだけじゃね？　俺から見れば、耳郎は……普通に良いと思うけどな」
上鳴がそれを言うなよ、と思った。そうしたらぴんと張っていた糸が切れたみたいに気が抜けた。
別に自分で思ってるだけじゃないし、それに普通に良いって何だよ。
「はいはい、ありがと。慰めてくれて」
「ほ、本当だぞ!?　別に適当なこと言ってんじゃ、」
「分かったって」
お前は恋愛対象にならないことなんかないんだと、そういう意味のことを上鳴の口から言われると本当に堪える。そこには、「俺はそうじゃないけど、誰かにとってはきっと」という言葉が隠れている。そんな姿かたちも見えない誰かなんていらない。これなら、女子として見え

ないと言われる方がまだマシのような気がしてくる。
「……でも別にそう言ったからって、あんたはウチと付き合わないじゃん？　そう言ってくれるのは嬉しいけど、」
苛々して、つい口調が強くなってしまった。
おまけに言ってから気がついたけど、これじゃあウチが上鳴と付き合いたがっているように聞こえそうだ。だけどもう、何でも良かった。仮にそう聞こえたところで実現なんかしないんだから。
ひびが入った心の殻は、完全にもう粉々に砕けていた。あんなに長い時間をかけて硬くつくったのに、壊れてしまうのはこんなに簡単だ。
もうどうにでもなれ、と開き直ったその瞬間だった。
「耳郎が良ければ俺は良いぞ」
上鳴がそう言った。
予想外の言葉に、思わず「え、」と唇の隙間から間抜けな声が漏れる。
「耳郎さえ良ければ、俺は。……もし耳郎と付き合えたら、嬉しい」
視線を横にやれば、上鳴は真っ直ぐにウチを見ていた。
……こいつは一体何を言っているんだろう？
「や、耳郎から見て俺はないってのは分かってるよ!?　全然格好付かねえし、頼りないし」
何をそんなに慌てて、いきなり言い訳みたいなことまで始めて。
「だから、今すぐ返事しろなんて言わないし、逆に聞くの怖ぇし。あ、てか耳郎好きな人いるんだよな!?　じゃあ、駄目か……。そもそも、今日はまだこんなこと言うつもりなかったんだけど……、あー、めちゃくちゃじゃん俺！」
忙しく表情を変えて、頬だけじゃなくて耳まで真っ赤にして照れている。おまけに落ち着きなく髪の毛をくしゃくしゃにかき混ぜている。
「え、どういう、」
展開が急過ぎて頭が混乱していた。ウチが状況を飲み込もうとする前に、上鳴は勝手にどんどん突っ走っていく。待ったをかけたいのに、全然人の話を聞く気配がない。
「あの、でも、俺がこんなこと言ったからって、変に気遣わなくて良い！　俺はお前と、これからも遊んだりしたいから、駄目なら駄目で今言ったことは全部忘れて欲しい。それだけは、」

真っ赤な顔を手で覆い、上鳴はうなだれた。よっぽど今まで身体に力が入っていたらしく、呼吸をする度に肩がわずかに上下している。

だけどとりあえずは停止したらしい。ようやく静かになった隙に、ウチはたった今浴びた上鳴の言葉をもう一度、思い返してみた。それらはどう聞いても、ウチの上鳴に対する気持ちを抜きにしてみても、そうとしか解釈できない言葉たちだった。目の前の上鳴の態度も、どう見てもそうだった。

何か言おう、と思ったら、急に心臓がドクドクと大きく鳴り出した。ゆっくり深呼吸をして鼓動を鎮めようとしたけど、全然落ち着く気配がない。緊張して舌が固まっていたけど、ウチは頑張って口を開いた。

「……上鳴、ウチのこと好きなの？」

こんなことを、自分の口から言う日が来るなんて思ってもみなかった。

上鳴はそのままの姿勢で小さく頷く。

「そーだよ」

「何なの、それ。どういうこと」

「ど、どうって言われても」

ウチの問いかけに上鳴は顔を上げた。戸惑った瞳と目が合う。

高三のあの日から、丸三年以上が経っている。これだけの間、ずっとこれは不毛な片思いなんだと思っていた。気持ちを切り替えようとしてもできなくて、ひねくれていたところもある。だからいきなりこんな風にポンと好意を差し出されても、すぐには手放しで信じ切れない自分がいるらしい。戸惑っているのはウチも同じだ。

だけど面食らっている上鳴を見たら、そんな自分の混乱をぶつけることに意味なんかないと気がついた。

「……さっき、好きな人いるって言ったでしょ」

上鳴の目を見つめたまま、ウチは言った。

「あれ、あんたのことだよ」

## 5

高校三年生のバレンタインの翌日に偶然聞いてしまったことを、ウチは上鳴に話した。

まさかウチが立ち聞きをしていたなんて思いもしなかった上鳴は、ものすごく驚いて、というか何ならウチが言わなきゃこのことは忘れていた様子だった。自分が何を言ったのかを思い出した上鳴は、慌てて弁明しようとした。当時瀬呂へ言ったことと同じようなこと（別に馬鹿にするつもりではなかったとか）を言ってきたから、それは分かっていると伝えた。

「……申し訳ないけど、あの時は本当にそう思ってた。俺にとって耳郎はそういうんじゃないって。そもそも耳郎だってそうだと思ってたし……」

ウチの話を聞いて、上鳴はすっかりしょげているようだった。どうやらあの時の発言は、本当に本音だったらしい。

「別に謝らなくて良いよ。ウチもその日に上鳴の話を聞かなかったら、ずっと気がつかないままだったかもしれないし」

いつからだったのか、それはもはや分からない。自覚をした日を覚えているだけで、その時にはもうとっくに始まっていたのだから。

上鳴も自分について、それと似たようなことを言った。

一年前に彼女と別れた後、芦戸と切島と一緒に遊んだことがあって、その帰りにふとウチのことを思い出して、気がついたことがあったと。

「俺、芦戸とか他の女子に対しては、女子扱いしたら駄目だなんて考えたことなかったなって。耳郎にばっかり、わざわざそう思ってたなって。それってつまり言い聞かせてるってことじゃん？　だから俺、本当は耳郎のこと、そういう風に見たかったというか、見ていたんだなって、気づいて」

上鳴は俯いたまま、記憶を辿るようにゆっくりと話した。

「そうしたらもう、そうとしか思えなかった。いつからだったのかは全然分かんねえけど、でも気づいたら妙に腑に落ちたっていうか。でも耳郎忙しそうだし、とりあえず出向は三年って言ってたから、それが終わって戻ってきたら、連絡取ってみようかと」

そしてそこまで言うと口を閉じて、ちらっとこちらを

見た。だけど気恥ずかしそうにすぐ視線を逸らされる。
「……そうだったんだ」
とりあえずそう返事をしたけど、後の言葉が続かなかった。一方的に聞いていたウチだって恥ずかしいのだ。
だけど、とても危ういバランスの上に立っていたんだなと思った。上鳴がもし気がつかなかったら、ウチらは今こんな会話をしていなくて、ウチはまたもやもやした気持ちを抱えて帰るだけで。そもそもウチだって、共有スペースで立ち聞きをしなかったらこんなに思い詰めるほど悩む羽目にはならなかった、はず。
全部が全部偶然で、上手く嚙み合っただけ。雄英高校にだって、どちらかが落っこちていたら出会えなかったかもしれないんだし。だからたまたま出会って、たまたま好きになった人がいて、その人も同じ気持ちでいてくれて、今こういう話ができているウチはとてもラッキーなんだろうな、とそんなことをぼんやり思った。
「でも、ってことは耳郎は、高三の時から、俺のこと……」
「……何にやついてんの。キモイ」
顔を上げたら、上鳴と目が合った。目線と口調はこちらを伺うような雰囲気だったけど、唇は緩んでいてちょっと口角が上がっている。それにつられて簡単に悪態が口から出た。ウチらの間の空気が徐々に緩んでいくのが分かった。
「だって、卒業してからも結構会ってたじゃん？　俺、全然気がつかなかった」
「当たり前だよ、隠してたんだから」
さらっと言ってはみたものの、隠し通せているか自信はなかった。自分としてはちょっとした場面で好意が出てしまっていた気がしたから。
「てかその高三のバレンタインの時、ウチ上鳴にチョコ買ってたんだよ。結構ちゃんとしたやつ」
せっかくの機会だから全部言ってしまおう、と思った。思い出にも重さがあるんだろうか。今まで胸に仕舞っていたかけらをひとつずつ外に出す度に、身体が軽くなっていくような感覚がする。
「えっ、マジ⁉　貰ってねえけど」
「だから、渡すタイミング迷ってた時にその話聞いて。ただのネタのつもりで買ってきたはずだったのに……それで渡す気失せて、自分で食べた」
そう、あの後ウチは部屋へ戻ってすぐにチョコの包みを開けて全部食べてしまった。四粒しか入っていなかっ

たチョコは、全部味が違って美味しかった。悲しくても美味しいものは美味しいんだなと、呆然とした頭で思ったのをよく覚えている。
「うわー、マジかよ！　ごめん、本当にごめん」
「でもその時貰っても、あんた困ったんじゃないの。ただの友達からちゃんと箱に入ったチョコなんか貰ったら」
「いや、普通に嬉しかったと思う、し、ころっと耳郎のこと意識してたかも」
「……は？　ちょろ過ぎでしょ」
「ちょろいって言うな！　だってそんなの貰えたら、なあ」
「……何でウチ、こんなやつ好きになったんだろ」
「おい止めろ。いきなり冷静になるな」
　ということは、ウチが勝手に遠回りをしてしまった可能性もあったのかもしれない。
　でもそんなことを考えても、今となっては仕方のないことだ。こんなに簡単にその気になるようなやつが、今日誰とも付き合っていなかったことだけ、とりあえず良かったということだろう。
　すっかりくだけた雰囲気になって、上鳴は軽い調子で笑った。ウチもこんな何の引っ掛かりもなく上鳴と話せたのはいつぶりだろう。懐かしいようでいて、でも確かに新しい空気も今のウチらの間にはあった。
「でもぶっちゃけ、会うまではどうかなって思ってたんだ。もう二年くらい会ってなかったじゃん？　もしかしたら、俺の記憶の中の耳郎を好きな可能性もあるなって考えてたんだけど」
「ウチもそれは、考えてた」
　今日会うまで、ウチも同じような気持ちだった。だからそれがぴったりと言葉に表わされて少し驚いた。性格は違うようでいて、時々こうして考え方が合うことがあるんだよなと改めて思う。
　上鳴にしては慎重でまともなことを言ったと思ったけど、たぶんこっちの方が上鳴の本質に近い気がする。さっきはチョコを貰えたら意識してたかもなんて言ったけど、そんなに簡単なことってなかっただろう。
　上鳴は一呼吸おいてウチを見て、それから視線を正面に戻した。
「……だけどやっぱ会ったら、気のせいじゃねえやって、思ったよ」
　そう言う横顔は恥ずかしそうに笑っていた。こんなにくすぐったい気持ちになるような上鳴の表情は初めて見

た。ウチの今日の感想も、上鳴の通りだ。
やっぱり、と改めて思う。当時の自分にああする以外の選択肢はなかったと。
上鳴への気持ちを自覚した一方で、恋愛なんてしている暇なんかないと思う気持ちもあったし、恋愛どころか趣味の音楽だって後回しにして、訓練とインターンに勤しんでいた毎日だったから。仮に高校生の時に良い感じになったとして、それから上手く付き合えたかどうかは分からない。だから、今で良かったのだと思う。今はすっきりとそういう気持ちだった。
そのままぼんやり上鳴の横顔を見つめていたら、「見んなよ」と恥ずかしそうに片手で軽く目隠しされた。こめかみの辺りに触れた指先の体温にどきりとする。少ししか触れていないのにちゃんと温かさが分かる。そのせいで何を言ったら良いか分からずにいたけど、手はすぐに外れた。
「ちょっと歩くか。せっかくこんな良いとこ来たんだからな」
視界が元に戻ると、上鳴は立ち上がっていた。
飲み終わったカップをゴミ箱に捨て、海を眺めながらのんびりと公園の端まで歩いた。会話はぽつりぽつりと、時々何も言わないこともあったけど、気まずくはない、そういう時間だった。
石階段を降りて砂浜に立った時に、ウチの足が砂に取られて、少し身体が傾いた。上鳴は前を歩いていたはずなのにすぐに気がついて、ウチの手を握ってくれた。「こけんなよ」と悪戯っぽく笑いながら、とても自然な仕草だった。
上鳴から転ぶななんて忠告をされなくても、転んだりなんかしない。別に平気だからと言うのが自分っぽいはずなのに、ウチは気がついたら素直に頷いてその手を握り返していた。そんな自分に驚きながら、二人で手を繋いで歩いた。
さっきの目隠しもそうだけど、こんな風に触れ合うことなんてこれまでなかった。なのに今はすんなりできている。恥ずかしいけど、嫌だとは思わない。ウチらはこれから少しずつ、こうして変わっていくんだろう。そんな予感が胸の中でいくつも散らばって、揺れている。
「俺、明日からも夜なら時間取れるから。耳郎空いてたら飯とか行こうよ」
手を繋いでから上鳴は、今度はよく喋っていた。照れ隠しなのかもしれない。その表情も声も視線もどこか穏

やかで、初めて知る上鳴の一面だった。ウチも今そんな風になっているんだろうか。鏡がないから分からないけれど。
「いーよ。でも明日から一泊家族で温泉行くから、明後日以降になるけど」
「そっか、せっかくの帰省だもんな。どこ行くん？」
「熱海。だからすぐそこ」
「良いじゃん。温泉良いなあ」
「お土産買ってくるよ」
「ん、楽しみにしてる」
　心なしか、上鳴の繋ぐ手の力が強くなる。声も嬉しそうで、お土産買ってくるってだけでそんなに喜ぶものなのかなと、変な気分だ。
　海の方から吹いてくるやわらかい風が、潮の匂いをいっぱいに運んでくる。上鳴の髪の毛を撫でて、ウチの耳たぶのコードを揺らして、通り過ぎていく。この匂いも、手を繋ぐ体温も、景色も、とりとめのない会話も、きっとずっと忘れないんだろう。これから先のことなんて誰も分からないのに、確信に近くそう思えた。上鳴に言うのは恥ずかしいから黙っていたけど、その代わりに少しだけ、ウチから握る手にそっと力を込めた。

読んでくださり、ありがとうございました！

シュガーコート　KAMINARI × JIRO

発行日：2021年11月6日
発行イベント：PLUTRA PLUS!! ~2021Autumn~
発行者：キノミント／mizuko
連絡先：kinomint_mizuko@yahoo.co.jp

これは個人が趣味で書いた非公式なファンフィクションです。
原作者様、出版社、その他公式とは一切関係がありません。
無断転載、複製、WEB上へのアップロードはしないよう、お願い致します。